

横浜善光寺留学僧育英会十五年のあゆみ

日本は世界最大の仏教国。しかし遺憾ながら、仏教界の現状は、依然として直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるかのように受け止めている。世界の犬勢に即応して教化の実をあげる態勢がまだまだできていないのです。さまざまな宗派に枝分かれた現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、なかなか各宗派が一丸となって事にあたるのはむずかしい。私たちが忘れてならないことは、現実を踏まえ、過去をかえりみ、未来の方向を見直すことです。人々の安心・平和・幸福を導く伝導界の改革はおろか、世界が滅びの道を突き進むのを止めることはできません。少しでも、その速度をゆるやかにするために、一人でも多くの人が力を合わせて、礎いしずえを築く必要があります。

私も新寺建立の初心に立ち還り、釈尊の教え——「眞実」の教えが絶えることなく伝わっていくようにするために、いまこそ、世界的視野に立ち教化できる人材育成こそ急務と観じ、「海外留学僧派遣」という大誓願を立てたのでした。所謂ひとりの仕事には限りがある。多くのあらゆる分野・衆知を集めねばなりません。しかし宗務当局や本山ならいざしらず、金もない力もない一寺の住職

がそのような壮大な大誓願を立てそれを実行することはいささか僭越がある、それだけに心配してくださる方、また、

「そんなことができるわけではない」

という声も設立当初は囁かれました。関心をもってくださる方には、ありがたいと思っておりました。でも、これは私が賦与された天の使命。生まれたときから、私の歩むべき道があった。私は自分の歩むべき道を一所懸命歩く。私の運命と思い唯ひたすら歩いてきた。何事も信念を持って行えば必ず実を結ぶと信じて歩いてきました。「法輪転ずるところ食輪転ず」と言われます。私は檀信徒のみなさまに、「毎度の食事ごとにおかず一口分だけ減らしてご協力してください。それで熱意のある若者を留学させたいのです。世界に仏法を広げる人づくりのために。未来の平和のために！」とお願ひし一人一仏と続けて参りました。共鳴し援助してくださる檀信徒のみなさまこそ、まさに仏そのものでした。そして、昭和五十九年一月、東隆眞、黒田俊雄、佐藤俊明、鷲見透玄、中村治雄、奈良康明という各先生方を育英会設立準備委員（後に理事）とし、最高の頭脳と活動力を得て、昭和六十年、記念すべき留学僧第一回生二名をタイのワット・パクナムへ留学させることができました。半年後、ワット・パクナムの住職に、「二人は稀にみる熱心で模範的な留学僧だ」と称賛され、私のよろこびは計り知れないものであります。



第一回育英生に辞令交付

翌年、アメリカとインド、スリランカへ四名。その翌年は、アメリカ、タイ、インドへ五名、中国から一人受入れ：第四回、五回、六回と、留学僧の派遣が実現し、立派に成長した留学僧の各方面での活躍は頼母しい限り、あれから十五年の月日がたち、留学僧はのべ八十八名にのぼりました。日本の若者を海外に派遣するばかりでなく、海外から日本に受入れる人数も増えて参りました。

育英会の関係国はすでに十八カ国（一地域）、派遣国は十三カ国（アメリカ・タイ・インド・スリランカ・イギリス・フランス・イタリア・オランダ・韓国・カンボジア・ドイツ・スイス・オーストリア）。受入れ国は九カ国・一地域（アメリカ・スリランカ・韓国・中国・フランス・バングラディシュ・日本・台湾・ポーランド・ベトナム）になっています。

留学僧の募集の範囲は、宗派を問わず、場合によつては僧籍がなくてもよし。学業操作とも優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るがないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまずの人材——そうした日本および世界の若者を選んで、留学中の旅費、生活費を負担。よくもまあ今日までこの至難の「行」が出来たことと不思議でなりません。「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」という瑩山禅師の教えに従い、留学僧派遣・受入れという一大事業の実現こそみ仏の成せるお力と思わずにはおられません。

寺檀一体となつて各国に派遣された留学僧たちは、それぞれの立場で物を見、

考え、修行にとりくんでおります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それはまったく未知数ですが、必ずや宗教宗派意識を越えて釈尊の教えを忠実に情熱を持って布教化する国際的宗教者となつてくれるであろうと私は信じています。やがて十年後、二十年後の世界に生き活きたとした仏法の泉を湧かせてくれることを思うとき、私の限りある生命が、世の中のなにかの役に立ち、一隅を照らすことができればよろこびです。

育英生たちには学んだことにつきレポートの提出を義務づけております。

世界平和と仏教徒の誓願

第十二回生 清水 晶子

(イギリス・ケンブリッジ大学留学)

(抜粋) 私たちは国際社会の大きな連帯と影響の中で生活している。そういう状況下では、お互い相手の立場を認めて理解し合い、異なる文化に対して寛容でなければならぬ。相互に誤解や障害を取り除くような努力を重ねていけば、そこには譲りあえる点が必要と見いだせるはずである。

人間は心の持ち方で生き方が変えられる。釈尊の説いた慈悲の精神は、私たちに示された、平和を樹立するための英知である。私たちは、この精神を誇り高く掲げて、不戦・恒久の平和の誓願を世界へ向けて伝えたい。



第八回育英生辞令交付式

留学僧として私はこれを学びたい

第十四回生 ウイリアム隆賢ダンカン

(日本・上智大学留学)

(抜粹) 日本の高校で東洋思想の授業を受けて以来禅に興味をもつようになり、その後アメリカの大学に進学しましたが、禅の修行を続け、大学二年の冬には故前角博雄老師の弟子である大道・ローリー先生が指導する禅マウンテン・モナストリーで修行するという機会を持つことができました。

そして大学三年の夏、日本で仏教英語研究会に出席した際、駒澤大学の小笠原隆元教授に出会いました。禅僧と大学教授という二つの役割をバランスよく果たす様子は、人生の多様性を考える上で私に深い示唆を与えてくれました。英国人と日本人の血が流れる私は、自分自身のアイデンティティの確立に悩んでいましたが、先生と会い、また禅を学んで以来一つの集団とか地位とかいうものから解放されたところに自己のアイデンティティを見いだせるのではないかと思うようになりました。

こうした留学僧たちの論文は必ず論文集としてまとめて刊行するようにしてきました。世界中から寄せられる真摯な論文に目を通すたびに、若い力が育ち成長していることを実感することができます。そして彼らが今後どんなに困難

な壁に突き当たろうともそれを乗り越えて、必ず花を咲かせ実を結び、また新たな種を彼らは蒔いてくれるであろう、と。

留学僧育英会は、檀家の方々の尊い援助と、すべて無給、この難事業に知恵と力を貸してくださる顧問、役員のご尽力に支えられてここまで成長してきました。ただただ感謝のほかはありません。

何年続かわからないという声のある中、応援、励ましのお言葉が、どれほど精神的支えになってくれたかわかりません。そして、十年という年月の達成は、感無量であり、感謝ばかりです。

十周年記念——さらなる努力を

「横浜善光寺留学僧育英会十周年式典」は平成六年三月に、善光寺釈迦殿で挙行されました。法要導師は駒澤大学の櫻井秀雄総長、式典には韓国の三大寺刹の一つ、靈鷲叢林通度寺から老天月下方丈、底岳泰應住寺、釈梵河宝物館長の三人が来日して参列し、老天月下方丈が「伝統は常に新たな創造の根源」と題して講演してくださいました。

「横浜善光寺のご住職であり、かつ、育英会の理事長であられる黒田老師が世界の仏教文化の発展と興隆に大きく貢献されていらっしゃるの、日本仏教界

だけでなく、韓国仏教界にも広く知られております。黒田老師の偉大なお力に深い敬意を表します。一昨年は、黒田御老師夫妻と、佐藤俊明老師、東隆眞老師の四人の先生方が私の通度寺をお訪ねくださり、金欄袈裟や大本山永平寺蔵版『正法眼蔵』九十五巻をご寄贈くださいましたことをこの席を借りてもう一度御礼申し上げます」そして、「昔の伝統は常に新しい創造の根源であるので、戒律を厳しく守ることがすなわち仏陀精神の根本であることを自覚し、通度寺の開創精神を守ってまいります」と述べられ、最後に頌偈（じゅげ・仏の徳や教えを讃える四句の詩）を贈ってくださいました。その中に、

—— 参禅在起疑团、疑去疑来似火团

（禅を学ぶには、まず問題意識を抱くことがもつとも肝要である。普段に問題意識を興して修行する情熱的でありさまは火のかたまりにも似ている）

—— 横拈拄杖参方去、气似将军战一场

（思う存分に拄杖——師を訪ね道を求めて行脚するときに携える杖——を手に持って、諸方を歴参する勇壮な気概は、まるで歴戦の將軍が戦場で戦うのに似ている）

という詩があり、育英会を創立してからの十年を振り返り胸が熱くなりました。

他の来賓の方々からも、多くの温かい励ましのお言葉をいただきました。



平成3年10月15日
韓国・通度寺にて

ロサンゼルス禅センターから駆けつけてくれた次兄・前角博雄主管からは、「育英会を理解し支えてくださる方々のお力と、向学心に燃え護法の念に燃えている留学僧の方々なくしてはできないことだ。たった十年でこれだけの仕事をしている。『世界一花』の言葉があるが、今後も二倍、五倍の花弁をつけ、これが法の華となって、世界中に芳しい香りを漂わせていただきたい」。

駒澤大学の鈴木格禅教授からは、

「道元禅師は五年の中国留学からお帰りになって『空手還郷』といわれた。当山の黒田方丈は空手にしてこの地に立たれた。普通なら何かつかもうともがくが、黒田方丈は手を放ち、心を開いた、そのことがすぐれた縁を抱くことになった。

宗教は人によって興り、人によって滅ぶ。仏教も人により時代に生き、地上に生きる。黒田方丈は仏教の原点に立って、真の人材を打ち出そうと発願された。そして、檀信徒に呼びかけられた。育英会の誕生である。

大財閥がしているのではない。何も持たずこの地に立った空手の原点を忘れず、それに共鳴された檀家の方々により歩みを始められた。そこには黒田方丈の祈りと誓願と回向の行持、行実の真があつたからである。ロウソクは自分の体を燃やすことよって周りを照らす。線香は身を焼くことよって豊かな香りを漂わせる。この会に育てられた方々は、黒田方丈の願いを願いとし、祈り

を祈りとして、学問、実践の分野で表に立ち、また地の塩となって人の世を照らす大いなる灯火となり、暗闇を救う妙香となっていたいただきたいと切に願う」。

第九回採用の留学僧であるスリランカ僧侶キリネティヤネ・ヴィマラワンサ師は、

「黒田先生にお目にかかって、本当にお坊さんらしく大きな活動をしておられる立派な方と思った。民族・文化の違いはあるが、仏陀の教えから見るととき壁はないことが日本に来てよくわかった。奨学金のおかげで、研究ができたことに感謝している。留学生は自分の国に帰ったとき、黒田先生のように世界のために生きることを願っている」。

と決意の言葉を述べてくれました。

みなさんの言葉を聞きながら、唯々合掌。仕事というものは自分がしたくてするものではない、世間さまがさせてくださるものだとつくづく思いつつ、さらに努力していくことを誓っておりました。

現在までの主だったできごと

平成十一年には、善光寺留学僧育英会も、早や十五周年を迎えることとなります。第一回生を派遣したときの感激、顧みますに昨日のここのように、しみじみと思い出すことができます。まさに、激動の十五年間でした。

留学僧募集要項



十五年の中で特記すべき事項をここで振り返りまとめてみたいと思います。

● 第一回派遣僧の帰国、第二回派遣二師の休暇帰国を機に昭和六十一年八月二十八日「第一回総会」を開催して以来、十四回、毎年総会を開催して今日に至る。

● 昭和六十二（一九八七）年十二月八日、上智大学アジア文化研究所とフランス・パリ第七大学主催による「第二回日仏セミナー」がパリ第一大学において開催。出席要請を受け、「新しい寺院経営を求めて」というテーマのもと一時間半講演。草稿はほぼ全文が『中外日報』に掲載。それを読んだ上智大学の安齋伸教授が「理想実現の実例に学ぶ」と題して同紙に記事を発表。

● 同年より、佐藤俊明常務理事とともに二人連れで、インドを振り出しに、スリランカ、マレーシア、タイ、ミャンマー、カンボジア、中国、台湾、韓国、アメリカ関係各国を歴訪。

● 昭和六十三（一九八八）年、タイ国ワット・パクナムより釈迦牟尼仏の尊像が寄進される。その四月、ワット・パクナム住職を招き、世界仏教徒連盟本部事務次長小谷亀太郎先生のお世話で黒田住職の息子四人が善光寺においてタイ式の得度式を挙げる。これは日本で初めてのことであり、タイ仏教親善友好にきわめて意義深いものと評される。

● 平成元（一九八九）年八月二十九日、第四回総会において、細則中、これま



日仏セミナー（パリ第七大
学会議場）

で留学僧の派遣先がタイとアメリカに限定されていたが、要望に鑑み、新たに「理事会においてその必要を認めるその他の国に所在する研究機関」の一項を加えた。さらに、留学僧の受け入れ先からの要請もあり、また、今後の推移を考え、第十一条として、「必要に応じ海外留学僧を講師として受け入れ先に派遣する」との規定を設けた。

なお平成二年、総会において、留学生のうち、大学の教授、助教授クラスは育英会の講師とすると決められた。

●平成三（一九九一）年十二月八日、『善光寺海外留学僧育英会論文集』第一集刊行。また、育英会発足に備えて、育英会設立の一年前に『成寿』の発行を企画し、以来年二〜三回発刊、今日までに二十八巻を数えており、留学僧派遣に關する記事はその都度同誌で報告している。

●平成五（一九九三）年二月六日、海外からの日本留学希望者が多くなってきたことから、第八回総会において、「善光寺海外留学僧派遣育英会」の名称を「横浜善光寺留学僧育英会」に変更。新名称決定と同時に、名誉顧問、顧問、理事、参与が新たに委嘱された。

●平成六（一九九四）年一月、「育英会十年の歩み」と題して台湾大学にて講演。三月三十日、「横浜善光寺留学僧育英会設立十周年記念式典」挙行。四月、『法燈の国際化をめざして』発刊。五月三十日、「善光寺開創二十五周年記念式典」



子息四人のタイ式得度式

を挙行。八月、権大教師に補任。十月二十四日、二十六日、通度寺にて記念講演のため渡韓。十一月、ワット・パクナム留学生訪問、インドネシア・ボロブドールに参拝のため一週間の予定でタイとインドネシアへ。

●平成七（一九九五）年二月十日、白純大和尚十七回忌法要。三月、当山開基家ナリス化粧品株式会社社長村岡有尚氏逝去。四月、国際仏教興隆協会評議員に就任。五月、ロサンゼルス禅センター主管ならびに善光寺育英会顧問・前角博雄老師急逝。七月、アメリカの各禅センター訪問、講演のため一週間渡米。十月、ワット・パクナム表敬訪問とバンコク仏跡参拝のため渡タイ。

●平成八（一九九六）年三月三日、総代伊藤喜三郎（三喜庵）先生逝去。五月八日、『育英会論文集』第二集刊行。十一日、十三日、タイ国ワット・パクナム住職ソムデッド副法王就任祝賀会に日本代表として出席。六月、大本山總持寺余語翠巖老師副貫首就任式に出席。八月、韓国釜山へ育英会打合せのため渡韓。十一月十三日、メモリアル横浜において、「今あなたは幸福ですか？ 豊かな人生とは」を講演。

●平成九（一九九七）年二月十四日、富山県小矢部市教育委員会の依頼により、「心やわらかに生きる」を講演。四月六日、日本テレビ『宗教の時間』にて、「己を捨ててこそ——わが修行時代の原点」をテーマに対談・放映。十八日より一週間、北米開教七十五周年式典参列のため渡米。七月二十五日より一週間、

平成元年3月
タイ国ワット・パクナムにて



平成5年10月
中国・天童寺監院老師と



アメリカ禅センター三十周年記念講演のため渡米。十月十三日、SZIワークショップ企画シンポジウムで「海外開教師支援について」をテーマにパネラー出演。十二月十一日より六日間、スイスローザンヌ大学仏像・仏書贈呈式のため渡瑞。『仏教思想』等四十八書の書籍を贈呈。

●平成十（一九九八）年二月、第十二回留学僧育英会総会ならびに第十四回育英生辞令交付式開催（育英会総会、育英生辞令交付式は毎年の定例行事）。

（四育英生に辞令交付（成寿より））

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は、第十二回総会と第十四回育英生の四人に対する辞令交付式を二月七日、善光寺で執り行った。総会ではニューヨーク州立大学教授の伊藤博氏が「国際化への反論」と題して卓話を行い、どの国にもともにプラスになるように地球的規模で考え行動すべき時代であることを訴えた。

総会では新しく育英生に採用された四氏のうち、すでにタイ国ワットパクナムに留学している一人を除く三人が、今後の抱負を語った。

黒田理事長は、「初心を忘れず誓願を成就していただきたい。そして皆さんの力で世界平和を実現してください」と激励し、光真寺の黒田俊雄老師は、「善光寺の方丈は利他行の人だ。利行は一法なりというが、人に尽くす



平成7年8月
ニューヨークマウンテン
インセンター主管と共に

ことがこれからの道だと思っっている」と挨拶した。

六月、スリランカ・サラナンダ財団から「国際栄誉賞」と「称号」を受賞（別記）。九月、『横浜善光寺留学僧育英会論文集』第三集刊行（全三二二ページ）。

まだまだ他にも印象に残った行事・できごとは多いのですが、おおまかに今までの流れをまとめてみました。

論文集も三巻そろい、その中ですばらしい先生方に序文を寄せていただきました。次のような多くのご文章をいただいたことが、どれほどの励みとなったことでしょうか。

駒沢女子大学学長 東 隆 眞

そもそもこの育英会は、理事長黒田武志（大圓）師の発案、企画、実行に始まる。育英会の本質、性格、特色ないし方向性は、師の学問、修行の経歴、または善光寺住職としての運営の実績にもとづくものである。

黒田師は、みずから求めて苦難の中に飛び込み、自らの道を開拓してきた。師は寺に生まれた寺の子ではあるが、葬式、法事しかしなくなった職業的僧侶とは質を異にするので、あるいは一種の異端児かもしれない。それゆえ、ときにはやっかみ半分で、非難中傷を浴びながら、忍の一字をまもり、信じる道を選んできた。このような波瀾万丈の道程を厳しい体験を通じて、グロ―バルな視野に立つ佛教の興隆、世界平和を実現したいという夢が、育英会誕生の契機となったのだろうと私は受け止めている。

この育英会は、善光寺一カ寺の企てである。全佛教団、一宗全体の大事業ではない。しかも留学僧は宗祖を通して釈尊にかえるという着眼点に立ち、一定の資格と志さえあれば、所属の宗派を問わないのである。

このような破格の企てを、寡聞にして、私はほかに知らない。この聖業を多くの人が知っていただきたい。同時に黒田師の壮挙を高く評価したい。

東京大学名誉教授・東方学院院长 中村 元

長年にわたって単独の寺院が外国へ留学僧を送り続けるというのはいへんなこととあります。このたび横浜善光寺留学僧育英会は、昭和六十年度の第一回生から数えて平成十年度の第十四回までに、のべ八十八人の留学育英生を送ることになりました。その派遣国も世界十三カ国、受け入れ国は九カ

国一地域に及ぶと聞いています。同会の黒田武志理事長をはじめとする関係各位の方々のご熱意とご浄行には感嘆の念を禁じえないものがあります。

このたび、《横浜善光寺留学僧育英会論文集》第三巻が刊行される運びとなりました。本巻はアメリカ篇の特集です。とりわけアメリカ禅の新しいいきを感じていただきたい。第一巻、第二巻に引き続き、第三巻刊行というその麗しいご浄行を壽ぎ、かつ留学僧育英会のさらなるご発展を祈念して、一文を草した次第であります。

こうした、留学僧育英会を温かく見守り、ご支援してくださる先生方に支えられ、私は生かされてまいりました。

この十五年間、若さと情熱を秘めた覇気ある国内外の男女と、力強い支援者ならびに受入れ国の高い評価に支えられて、育英会は順調に発展してまいりました。まさに仏天のご加護としかいいようがありません。

サラナンダ財団から国際栄誉賞と称号を受賞

平成十年六月。善光寺開創三十周年を迎えようとする節目の年に、みなさま方のおかげで、人生の記念に残るすばらしい賞をいただくことができました。

『中外日報』では次のように報じられました。

スリランカで長年にわたり、教育・文化・宗教活動を展開した高僧、ウド
ウヌワラ・サラナンダ・セロの業績を世に広めるために創設された政府公認
の慈善団体「サラナンダ財団」は「国際栄誉賞」として、日本の横浜善光寺
留学僧育英会理事長の黒田武志氏（曹洞宗善光寺住職）と、法華仏教国際交
流協会の石井英雄会長（日蓮宗長照寺住職）をはじめ四人を選んだ。授賞式
は六月二十日に現地で行われた。

財団では、毎年、若い僧侶や社会活動家、学者、仏教の外護に尽くした信
徒などをえらんで「栄誉賞」を贈り、その業績を称えている。

今年度の受賞者は十一人で、そのうち、日本人からは黒田氏と、石井氏は
じめ協会のメンバー四人。黒田氏は横浜善光寺留学僧育英会を設立し、仏教
を学ぶ僧侶や研究生を支援する育英事業を長年続けて、これまで世界十三カ
国に日本の留学生を送りだし、九カ国一地域から外国人留学生を受け入れて
きた。留学生には育英金と滞在に必要な経費と往復旅費を支給している。ス
リランカから日本への留学生は三人、日本からスリランカへの留学生は四人
にのぼっている。授賞理由の中で、財団は黒田氏に対し、「この育英会は世界
の仏教修学僧に奨学金を与えている。これまで師はスリランカに対する七人
の者に留学奨学金を与えさらに、他の十三カ国へも八十八人に奨学金を提供
している。われわれは尊師の活動と献身を評価する」と称えている。



昭和63年8月28日
マウンテンセンター禅堂

授賞式は、シンハラ王国の首都だったクルネーガラ市の公会堂で挙行され、会場には千人を越える僧侶や信徒が参集し、スリランカ仏教の最長老であるマハナヤカ派のウエヴェデラニヤ・メダランカラ大僧正、ラタナヤケ国会議長、ロクバンダラ前文化教育宗教大臣、セクラジャパティ中央議長、財団のゲムノアビスヌル理事長、クレトウンガ文化教育宗教大臣、シニセーティクレ建設大臣ら要人が列席した。

盛大な歓迎を受けて式典に臨んだ受賞者は、ラタナヤケ国会議長から一人ずつ団扇のかたちをした記念楯（アルアッタ）と表彰状を授与された。

受賞者を代表して日本の黒田氏が謝辞を述べ、「伝統ある古い都で榮譽ある賞を受けたことを光榮に思う。日本とスリランカは共に仏教の国であり、釈尊の教えを信奉している。人類が釈尊の教えにより平和になるようお願い、ブツダの心で生きていきたい」と決意を披瀝した。

私は代表して受けましたが、この「国際榮譽賞」は、真剣に世界平和を願う歴代育英生、育英会に絶大なるお力を貸してくださった先生方、檀家のみならず一人ひとりが受けた賞として、この法幸をたいへん嬉しく、そして誇りに感じております。また今年二月には曹洞宗管長より育英会事業に対し管長賞を



授賞式にて

いただいた。この思いを善光寺発行の機関誌『成寿』の巻頭言に載せさせていただきますました。

巻頭言

善光寺住職 黒田 武志

此の度、スリランカ政府公認の慈善団体「サラナンダ財団」より——仏教を学ぶ若い僧侶や研究生の海外留学と、外国から日本への留学生を支援する育英事業を高く評価する——との理由で国際部門の『栄誉賞と称号』を授与されました。称号は「ダルマ・ケールティ・スリ・ローカルタ・チャリエ」(Dharma Keerthi Sri Lokartha Charie)で、仏教の発展に寄与し世界人類の幸福と繁栄に尽くす、という意味であります。

これはひとえに育英会に関係された方々、又檀信徒の皆さまのご尽力の賜であり、深謝し心から厚くお礼を申し上げます。

去る五月には、ロサンゼルス禅センターの開創三十周年の式典に参列いたしました。前角博雄老師亡き後も、禅がアメリカに根強く息づいていることをひしひしと感じて帰りました。

成願寺山口晴通住職は白人社会での禅修行の実態を見聞しともに禅を語り合い「亜米利加の禅堂を訪う」と題して、



拈來公案共論禪 公案を拈じ来て共に禪を論じ

碧眼僧衆衣鉢伝 碧眼の僧衆衣鉢伝う

誰識往時開教志 誰か識る往時開教の志

坐堂窓外聴清泉 坐堂窓外清泉を聴く

と感激をよまれておりました。

また、今回、宗門関係の大学めぐりは、東北福祉大学をたずねました。萩野浩基学長は「二十一世紀は心の時代であり、大自然、大宇宙から逆に自己を照らし出し、自己をふりかえり、責任ある実践が明日の道」と語っておられます。

釈尊は『足ることを知るものは心安らかなり、足ることを知らざるものは、富ありといえども貧し』と申されております。日々の生活を反省し、心して生きて行きたいものであります。

今こそ、我々は心から「社会」との調和をはかり、生きとし生けるものの生命と自然を大切に、国際社会の平和と繁栄と人類の幸福に向けて、皆様と共に大いに貢献をいたしたいと念じております。

世界中の若き僧侶が、互いに異国の文化習慣を理解し尊重し合い、仏教の原点に立ち還り、世界平和の実現に寄与することを願ってスタートして十五年。

今なお世界のあちこちで、武力行使によって相手を屈しさせる方法で平和へと導こうとしている報道が流れています。たとえ一瞬争いがおさまっても、それは真の平和とはいえないでしょう。屈辱の炎がくすぶり続ける小さな、そして誇りある民族は、再び「自分たちの平和」のために立ち上がり、そしてまた大國が押さえつけ、いつまでも悲劇は繰り返される……。わたしの願いは、真の平和に満たされた二十一世紀を迎えることです。そのためには、真の教え——すばらしい釈尊の教えを後世に残すような人材を育て続けるしかないという信念を持っております。二十一世紀をはばたく、真の平和の使者となる仏教徒たちに、私の願い・命すべてをバトンタッチできる日まで立ち止まることなく、たとえ艱難な道でも一歩一歩前へ進んでいきたいと思っています。悲劇のない未来に向かつて。

(育英会十五周年の道のり)

出会いは一生の財産となる

「人は他者とともに生き、出会った数ほどその人生がある。出会いとは、他者を通じた自己との出会いである」という言葉があります。人との出会い——出会いがよろこびであり、私も最善の時に最善の場所で最善の人に出会ってき

た。そして最善の仕事が与えられた。これこそ人間のはからいではなく、大いなるみ仏の導きであると、この三十年痛感して参りました。決して人は一人で生きているのではない。仏として有縁無縁の多くの人によって生かされているのです。たとえ、み仏の仏弟子となって召され、この世での別れがあったとしても、護られ続けているのを感じることが出来ます。

禅の国際化に生涯をかけた兄

平成七年（一九九五年）五月、私の人生の方向づけをしてくれ、いつも心の支えとなってくれた兄前角博雄老師が遷化されました。四十年という長きにわたって、アメリカという多種多様の人種・宗教・言葉・習慣・文化の混じり合う巨大な未知の国で身を粉にして禅の精神を伝導し、多くの外国人師弟を育てあげた偉大な師でありました。

いつもいつも、私にとってケタはずれにスケールの大きい兄……そんな兄から、私は生涯の宝となる手紙をいただきました。

「宗祖を通して釈尊に還れ」の命題は、方丈の多年の宿願と拝察しております。一宗一派の信条を越えた菩薩行は、日本の僧侶学者のみならず、他国の有力な人材を含め、着々とその輪を世界各地に広げておられ、その偉業は



故前角博雄老師

称賛に堪えません。国際性と、国際性に輪をかけたグローバルな視座と、それにとまなう実動の必要性が痛感され、また、叫ばれる昨今、善光寺の留学僧派遣の理念が年を逐って実現を増幅し、その檀那波羅蜜多に応える逸材が着実にその成果を具象化している次第を有り難く感得しております。

若い頃はただかわいがられ、諭されてばかりの私が、やっと兄に認めてもらえるようになったと感激の涙が流れたものでした。

育ての親・ナリス化粧品皆さま

善光寺の開基となつてくださったのが、大阪の(株)成寿堂本舗(現・株式会社ナリス化粧品)社長・村岡満義氏です。私が大本山總持寺でまだ修行中の頃。夏季摂心(五日間の連続坐禅)に社員の方々とともに参加しておられたのが私との出会いです。

まさに、恵まれた出会いでした。このときのことを回想し、常務取締役・東郷敏氏は、善光寺開創十五周年式典で次のように述べられました。

「私が黒田武志先生とめぐり合わせていただいたのは、昭和三十八年、總持寺の夏季摂心であったと思います。私は社長に連れられはじめての参禅でした。ただ、給料のためにとイヤイヤながらの坐禅、時に私は人より体が固く人並み



總持寺修行時代
参禅指導

に坐れない、余程姿勢が悪かったのでしょう。指導してくださる或る雲水の方が、私のゆがんだ身心を見抜かれたのか、格別な指導と警策を打ち下して下さる。お前、死ねなどと、それはもう大変でした。私は少々恨みを持ってその御当人を確認させていただいたのですが、その方が、黒田先生だったわけです。

さて、いよいよ打ち上げの日。私は社長や息子の専務とともに帰り支度をしておりました。そこへあの厳しい雲水がシャシャと飛び込んで来たのです。私にとって許し難いこの雲水、恨みも消えておりませんでしたので、申し上げたのです。

「先生、悟りというものは何ですか」
すると先生はワツハツハと豪快に笑って、そこにドツカと坐り、ツルツル頭を掻きながら

「私も修行の身、悟りがわかれば、こんな所にはおりませんよ」とおっしゃる。呆氣にとられてしまいました。この人はお坊さんんだけど悟りもわからん。なんたること。禪堂とは別人、底抜けに明るく天真爛漫、何とも温もり溢れる人間味、この新鮮な感動に震えてしまいました。われわれといっしょだったんだなあ。そう思ったとたん何ともいえない安堵感と、そして親しみが湧いてきたのです。ひよっとして、この先生、将来一緒なら何かいいことがあるのではないか…そんな気がしたのでした。

そこで社長に、「あの警策の打ちおろしは、尋常ではありません。何かワケがあるのではないか。ぜひ会社にお呼びして坐禪の指導をしていただきたいものです」と言いますと、それもいいということでお願ひしましたところ、「いつでもか」とおっしゃる。いつでも結構ですと申し上げると、「じゃ明日お伺いしましょう」とすぐのご返事。会社は突然の臨時休業二泊三日、全社員参加で、坐禪指導をいただくことになりました。

私は、打ちのめされたことに対してお返しをしたい気持ちがありました。幹部社員十五人くらいで打合せをし、先生をこらしめるにはこれしかない、ということ、参禪中合掌し続けることにしたのです。そうすれば先生は叩き続けなければなりません。先生もきっと参るだろう、と思ったのです。それからもう戦争です。私たちの衣服は裂け血がしたり、警策棒も折れ飛んで何本あっても足りるものではありませんでした。先生は手を抜かず叩き続け、手のひらの豆がはじけ真つ赤。その内手もとが狂い、ハアハアと息遣いが堂にも響いている。社長が突然「お前らは坐禪ではない。喧嘩だ、やめろ！」とどなっている。仕方なく途中でやめてしまいました。もしも止められなかったらどうなっていたことか。

しかし、お互い本気で真剣に向かい合い、傷だらけの中でつちかわれた心と心の結び合い、終って抱き合い、「共に生きたい！」と瞬時に方向を共有してい

ました。

間もなく總持寺の修行を終えた先生は、「インドとタイで修行したい」「アメリカで坐禪の布教をしたい」などと申し出られ、都度、修行の御金をお運びになる。先生が来ると、ゾツとすることばかりが続く。けれども社長は、何も言わずに申し出に従いこの方に、この方に、ということとで工面しておいででした。先生との御縁により、何故か会社の空気も高まり、社内は結束、営業の成績もどんどん上がっていく。不思議と会社は、黒田先生を知ることによって黒字続き、思わぬ利益も上げさせていただきました。従って先生とのご縁はさらに深まり、佛道を通じて先生のご貢献は大きく、これまで何かと多大な御力添えいただいたわけです。

私たちは商人でございますから、儲けることを第一とします。しかし儲けても世の為、人の為に使うということは簡単なようでも難しいことです。先生は使い方を教えてくださる。まことに以っていい関係。自発共鳴と申しますか、まことに人のご縁、出会いというものは異なるものでございます」。

その後、昭和四十四（一九六九）年、善光寺スタートから三十年たった今日まで、ナリス化粧品の方々が皆さんが一丸となって護りご支援してくださってきたのは前述した通りです。

人生の師・伊藤三喜庵先生

現代日本を代表する建築設計家でもあり、日本南画の大家でもある伊藤三喜庵先生との出会いは、今から三十数年前。若い僧たちで、インド仏蹟巡拝の旅に行く途中の飛行機の中でした。以来さまざまなかたちで、善光寺の護持に尽力していただきました。

善光寺十五周年を記念した機関誌『成寿』は、二十八巻となりましたが、発行当初から伊藤先生には表紙の絵、本文中さし絵、題字を描いていただき、全国読者のみなさんから絶賛をいただきました。お忙しい身だというのに、先生も『成寿』に描くことを、ご自分のライフワークとして楽しみにしてきましたと言ってください、一度も休まずに続けてくださいました。先生は「人間、嫌なことをやるのではなく、やらねばならないことが好きになる、これが人生だ」と言う。ほかに、魂が包み込まれるような水墨画を数々残されました。いつか私は、伊藤先生の作品を集め回顧展を開きたいと思っています。開創十五年目に建立した壮大な釈迦殿も、伊藤先生の設計によるもの、まさに、善光寺の頭脳中枢というべき尊師であり、私は父のように慕わさせていただきました。

平成八年三月、八十二年の生涯を閉じられましたが、最期まで、二十一世紀へのメッセージを伝え、学ぶ心や情熱を失わなかった伊藤先生の精神は、私の



故伊藤三喜庵先生

心の中に生き続けています。

この世に生を受けて六十二年、そして開創して三十年……他にも尊い仏縁をたくさんいただきました。

今日、善光寺の歴史はいつもご指導ご鞭撻くださる先生方。私の手となり、足となって、私の足りない部分を精いっぱい補ってくださる善光寺で働いてくださっている方々。また温かい慈悲の心でご支援くださる檀家のみなさま。

そして、どん底の中で私とともに苦難の道を歩んでくれ、常に精神的支えとなってくれ昼夜を分かたず身を粉にして寺院運営の実務を担当してくれた私にとってかけがえのない観世音菩薩。妻、倫子。今日あるは私だけが知る尊い存在であり歴史です。

私は非力な人間です。ひとりではやることはまことに小さく、限りがあります。これまで多くの恵まれた出会いによって生かされ、救われてきました。一度決心したことは最後までやり抜いて参ります。何をしても始める人は多い、しかし続ける人は少ない。続いてこそその道。私は今に人生のすべてを託し精一杯生命の完全燃焼を遂げる決意です。これまでの経験を生涯忘れることなく、大きな目的のためにさらに精進したいと願ってやみません。

